



山梨県は、どうしてブドウの産地になったの

早くからブドウをつくっていた

山梨県の中央にある甲府盆地は、年間の降水量がわりあい少なく、冬は気温が低いのですが、夏は気温が高くなるため、果物づくりに適した所です。そのため、勝沼町や、甲府市の西部では、早くからブドウづくりが行われていました。伝説では、1186(文治2)年に、上岩崎村(今の勝沼町の一部)の雨宮勘解由が、道ばたに生えていた一株のブドウを発見し、それをもち帰って、自分の土地で育てたのが始まりとも、また、中国から移入したとも、いわれています。江戸時代には、江戸へたくさん積み出すほど、ブドウづくりが盛んになりました。

西洋風ワインづくりを始めた

明治政府は、産業を興し、発展させる殖産興業政策を、おし進めました。この政策にそって、山梨県では、ブドウ産業の発展に、力を入れました。勧業場を設けて、ブドウづくりを試みたり、ワイン工場を建てたりしました。また、県のはたらきかけによって、祝村(今の勝沼町の一部)の人々が、ワイン会社をつくり、フランスへ留学生を行かせて、ワインづくりを研究させました。これが、日本での、西洋風ワインづくりの始まりです。

ワインブームでますます発展した

その後のブドウづくりは、病気や害虫によって、大きないたでを受けたりしましたが、農薬のふきゅうや、育てる技術の向上によって、これに打ち勝ちました。養蚕をやめて、ブドウづくりを始める農家も増えました。1972年ごろからは、ワインブームが起こって、大きい会社も次々に、勝沼町へ進出してきました。山梨県は、今でも、ブドウの生産量が日本一で、第2位の長野県を、大きく引きはなしています。(監修・青木 国夫)

